

意外！最先進地だった佐賀

——地方創生の先駆け

幕末期に近代化に向けて各藩が動き始めた頃、最も先行していたのは佐賀藩だった。現在のイメージから見ると意外、と言っては失礼だが、佐賀藩は薩摩や長州よりも先行して近代化に取り組み始めていた。

1830年に藩主に就任した鍋島直正が近代化を押し進めたのだが、当時の佐賀藩の財政は破たん状態にあった。そこで直正はまず徹底した儉約を打ち出すとともに、小作料免除など農村復興に取り組み、併せて有田焼や茶、石炭などの産業を育成し借金を減らしていった。今日でいえば、財政再建と成長戦略の組み合わせである。

次いでアヘン戦争(1840～1842年)などをきっかけに、直正は欧米列強のアジア進出に危機感を強め、西洋に対抗できる軍事力の強化に乗り出す。直正は長崎に入港したオランダ船にたびたび乗り込んで船内の隅々を見学して回り、西洋式の蒸気船と大砲を自前で造ることを決断するに至った。

その第1弾として建造したのが反射炉である。反射炉は、炉内で銑鉄を高温で溶かして大砲を製造するための装置で、その製造法を記したオランダの書物を藩士の蘭学者に翻訳させ、それをもとに1850年に建設に取り掛かった。本だけが頼りで何度も失敗を重ねたが、諦めずに試行錯誤を繰り返し、1852年に完成させ、大砲の製造に成功した。

注目すべきは、ペリー来航(1853年)より前ということである。佐賀の成功を見て、薩摩、長州、さらには幕府などが反射炉建設に乗り出した。反射炉は幕末期における近代化のキーテクノロジーとなるが、佐賀がその先鞭をつけたのだった。佐賀藩はその後、反射炉を増設し、洋式大砲を大量に製造していく。ペリー来航後に幕府が慌てて江戸湾内に台場を築造したが、そこに配備された大砲の大部分は佐賀藩が製造したものだ。

反射炉に続いて、洋式の造船ドックを建設し、日本で初めて実用化された洋式蒸気船を建造した。こ

のように佐賀藩は他藩や幕府をしのぐほどの軍事力と技術力を身に付けていた。時代は下って戊辰戦争の際、佐賀藩の大砲が威力を発揮し、討幕軍の勝利に大いに貢献した。

しかも重要なのは、それらすべて佐賀藩が自力で

実行したということだ。前述のように、当初は財政が破たん状態だったが、当時はもちろん国(幕府)の補助金も地方交付税もない。そこからすべて自前で財政を立て直し、藩の経済を富ませ、西洋技術の導入を図ったのである。

これら一連の佐賀藩の取り組みは、まさに地方創生の先駆けである。佐賀に続いて近代化に取り組んだ薩摩や長州も同じだ。逆に言えば、“地方創生”に成功した藩が新しい時代の主役になったのだ。

佐賀藩はグローバルな取り組みも進め、1867年に開催されたパリ万博に出品した。同万博には薩摩藩が幕府に対抗して出品し海外広報・IRに成功したことは前号に記した通りだが、佐賀藩が出品した有田焼は高い評価を受け、浮世絵と並んでジャポニズムの一翼を担う役割を果たした。佐賀藩はここで幕府と対立したわけではないが、独自のやり方で広報・IRで成果を挙げたと言える。

現在、海外からの日本への評価が改めて高まっている。当時の佐賀藩のように、地方から直接海外に情報を発信しビジネスチャンスを広げることが重要で、それが地方創生のエネルギーにもなり得るものだ。



岡田 晃
(おかだ・あきら)

大阪経済大学大学院客員教授・経済評論家。
日本経済新聞社編集委員、
「ワールドビジネスサテライト(WBS)」マーケットキャスター、
テレビ東京経済部長、
テレビ東京アメリカ社長、
理事・解説委員長などを歴任。